

(3) 下諏訪町ふじ塚遺跡の礫石経塚 その構造と特徴

河西 克造

1 はじめに

昨年度と今年度、長野県埋蔵文化財センターでは一般国道20号（下諏訪岡谷バイパス）改築工事に伴い、諏訪郡下諏訪町に所在するふじ塚遺跡の調査を実施した。遺跡内には「ふじ塚古墳」の名称で遺跡登録された古墳（方形のマウンド）があり、昨年度の調査では、このマウンドが「塚」と判明し、塚の下層で「礫石経塚（一字一石経塚）」を発見した。本稿は、この塚と礫石経塚の様相について、仏教考古学の視点を加味しつつ、調査担当者の私見を披歴するものである。

2 ふじ塚遺跡とふじ塚古墳

長野県のほぼ中央部には、県内で最も広い諏訪湖がある。諏訪湖の北側（湖北）、諏訪湖に流入する砥川右岸の河岸段丘上にふじ塚遺跡は立地する。砥川の反対側には、諏訪大社下社春宮が鎮座する。河岸段丘の縁辺部付近に立地する「ふじ塚古墳」は、昭和37年に『下諏訪町誌』編纂に伴う調査を藤森栄一氏が行っている。藤森氏はマウンドが低いことと富士山を望む景勝な地に所在すること、遺跡周辺は山岳信仰が盛んな地であることから、ここが富士講の富士塚に類するものと指摘した（藤森1963）。さらに、高島藩主五代諏訪忠林が享保18年（1733年）に領内各村に描かせた村絵図（『諏訪藩主手元絵図』）には、この場所に「藤塚」の文字が描かれており（諏訪史談会1985）、明治末年の地籍図でもマウンド（土地区画）の小字が「藤塚」であることが確認できる¹⁾。これらの既存情報は、マウンドが信仰塚としての富士塚である可能性をうかがわせるものである。

3 ふじ塚古墳（マウンド）の様相

マウンドは一辺約11m四方の方形を呈し、マウンドの上面はほぼ平坦である。マウンドの上面では、硬化面や礎石と推測する礫が確認でき、随所

に及ぶ攪乱のため建物跡としての認定は困難であったが、ここに何らかの構築物が存在した可能性が高い。このマウンドは、裾部に石列を方形に配置し、土石混合で構築されている。マウンドには半人頭大～人頭大の礫が多量に含まれ、あたかも積石塚古墳を想起するものであった。さらに、マウンドの西側は硬化する土が主体、東側は礫であ



第1図 昭和37年の「藤塚」の様子
(藤森栄一氏撮影、諏訪市博物館所蔵)



第2図 ふじ塚古墳 調査前の様子（図1と同じ方向より撮影）



第3図 土石混合で構築されたマウンドの様子

る特徴がみられた。盛土（石）は、大きく2分される。また、マウンドの盛土からは、近世末の陶磁器や銭貨、礫石経（一字一石経）が出土した。

上記の調査成果から、マウンドは近世末まで存続した「塚」と理解できる。なお、礫石経には、礫を積み上げる過程でまとめて納られたものがある。何らかの容器に入れられていたものと推測でき、これら礫石経はマウンドに仏教的要素が介在することを示す。

4 礫石経塚の様相

マウンド（土石混合）を除去して姿を現したのが、約40,000点に及ぶ夥しい礫石経（以下、礫石経塚）である。この礫石経塚は、長辺7.0m、短辺4.5mの規模を有する。拳大～人頭大の礫で石列を楕円形に配置し、石列の内部に礫石経が納められている。これら礫石経の上面には起伏があり、礫石経の間には随所に隙間がみられた。旧石器時代のブロックを想起するもので、ブロックの存在は、礫石経が複数の単位で納められたことを示すものであろう。

礫石経塚からは、和鏡（15世紀）とかわらけ（16世紀）、銭貨（宋銭・明銭）が出土している。和鏡とかわらけは、礫石経塚のほぼ中央部、礫石経の上面から確認されており、礫石経を納める行為の最終段階で納められている。和鏡は表面を上位にして置かれている。かわらけは、2個のかわらけが合口の状態で出土しており、供物などが納めたと推測する。和鏡とかわらけの出土は、この礫石経塚で仏教的な儀礼が行われたことを示すものであろう。なお、和鏡とかわらけを囲むように、人頭大を超える礫が分布する。この礫は、経碑的な性格を持つか、もしくは礫石経塚の中央部に、何らかの空間を形成するためのものかは、今後の検討で明らかにすべきことである。また、礫石経に混じる状態で出土した71枚の銭貨は大半が宋銭で、永楽通宝などの明銭が含まれている。

かわらけと銭貨（永楽通宝）の年代から、礫石経塚は16世紀のものと比定できる。この時期、ふじ塚遺跡とその周辺において書写した礫石経をこ

こに納める一連の作善業が行われていたと判断できよう。

5 出土した礫石経の様相

調査では、文字の有無に関わらず、すべての礫石経を取り上げた。本格的な整理作業は緒に付いたばかりであるが、現時点までの観察では、約8割の石に文字が書写されていることが判明した。礫石経は、2～3割の石に書写されている事例が多いとの指摘²⁾からすると、ふじ塚遺跡の礫石経は書写割合が高いことが分かる。また、確認で



第4図 礫の積み上げ時に納められた礫石経の様子



第5図 礫石経塚の様子

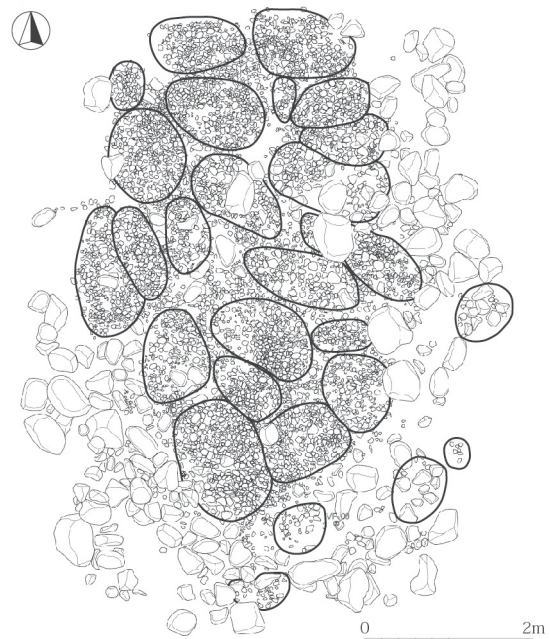


第6図 和鏡とかわらけ、礫の出土状況

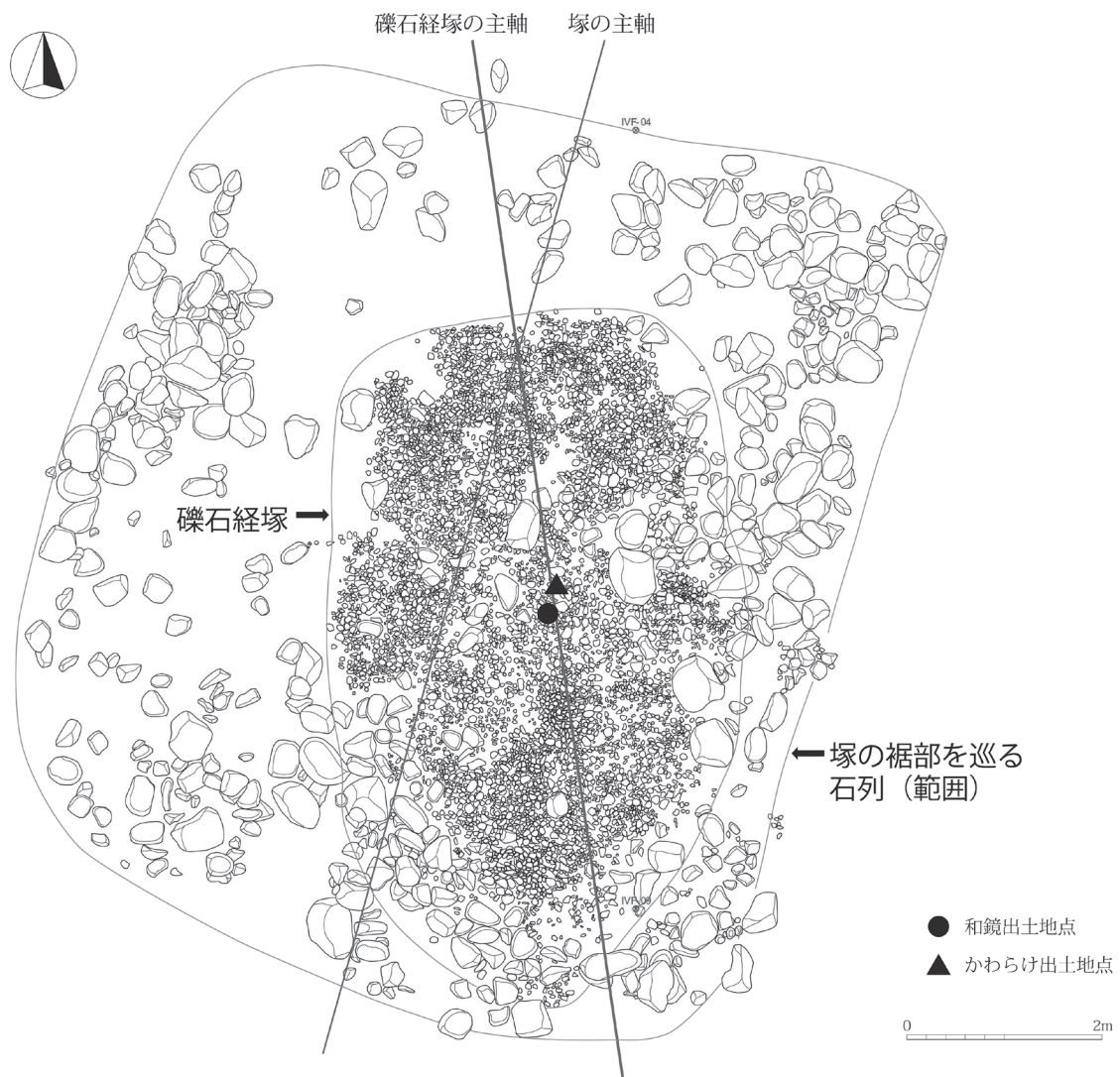
きた文字からすると、法華經（妙法連華經）を主体として、大日經や浄土三部經、梵字が書写されていることが判明した。さらに、經典名が判読できる礫石經の分布域がまとまる傾向があり、書写された文字は①礫石經塚全体の組成、②ブロック単位の組成を把握することで、礫石經の書写形態と納め方が明らかにできると思われる。

6 礫石經塚から塚への変遷

礫石經塚は、「礫石經を地下に埋納し、上部にマウンドをもつものが基本的な形態であるが、（中略）埋納後にマウンドを構築した場合とマウンド構築後に埋納した場合があったことが知られる。」とされている（時枝2003）。広義にみると、礫石經が出土したマウンドを「礫石經塚」と捉え



第7図 礫石經塚 ブロック認識図



第8図 礫石經塚と塚の石列 全体図

られるが、ふじ塚遺跡では①マウンドと礫石経塚は主軸が異なること、②マウンドの裾をめぐる石列と礫石経塚の石列は重複し、後者が先行すること、③礫石経塚は低いマウンド状を呈することが確認できた。かかる状況から「塚」と「礫石経塚」とに分けて捉えることができる。16世紀から近世末まで、ここが信仰の拠点であったと理解できる。

7 礫石経塚の造営について

中世以降の礫石経塚は、六十六部聖などによる廻国納経が盛行したと指摘されている（三宅1983、関1990）。かかる視点からすると、万治3年（1660年）に弾誓上人50回忌に明誓・心誓が造立した万治の石仏がふじ塚遺跡の直下に存在することは興味深いことである。礫石経塚は、諏訪を



第9図 万治の石仏（河西撮影）



第10図 大乘妙典二萬部塔（河西撮影）

拠点として浄土宗の布教を行った弾誓上人だけでなく、中世末の諏訪における聖の動向と密接な関わりがあると推測できる。また、茅野市湯川経塚（一字一石経塚）出土の経筒には、天文15年（1546）の銘とともに「奉納大乘妙典」とあり（宮坂1967）、造塔年はやや下るが、諏訪には法華経の読経もしくは納めた大乘妙典塔が残る。聖の活躍を把握する必要がある

管見の範囲で、塚と礫石経塚の関係が考古学的に把握できた事例はない。「ふじ塚遺跡の礫石経塚は、今までの調査事例では説明が困難で、礫石経塚の概念を見直すことに迫る資料となる」との時枝氏の言句に象徴されるように、今回の成果は、礫石経研究の進展に大きく寄与することになるだけでなく、従来不明瞭であった中世末～近世初頭の諏訪地域の民衆史・宗教史解明に向けて踏み出す必要性を我々に訴えたことは間違いない。今回触れることができなかったことは、別稿を期す予定である。

註

- 1) 長野地方法務局諏訪支局所蔵の「長地村第八十三番区域絵図」と土地台帳
- 2) 立正大学文学部教授 時枝 務氏の指導による。

引用・参考文献

- 坂詰秀一 1990 「経塚」の概念『古代学研究 所紀要』1
 諏訪史談会 1985 「東山田村」『諏訪藩主手元絵図』
 関 秀夫 1979 「経塚遺物の紀年銘文集」『東京国立博物館紀要』第15号 東京国立博物館
 関 秀夫 1990 『経塚の諸相とその展開』雄山閣
 時枝 務 2003 「経塚」『仏教考古学事典』雄山閣
 長谷川桂子 2021 「ふじ塚遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報37 2020年度』
 富士塚調査研究委員会 1996 『富士塚調査報告書』富士市立博物館
 藤森栄一 1963 「庄塚と藤塚」『下諏訪町誌』上巻 下諏訪町誌 編集委員会
 松原典明 1994 「礫石経研究序説」『考古学論究』第3号（「特集：礫石経の世界」）立正大学文学部考古学研究会
 三宅敏之 1983 『経塚論攷』雄山閣出版
 宮坂虎次 1967 「茅野市北山・経塚調査略報」『信濃考古』No.22
 宮島潤子 1983 『信濃の聖と木食行者』角川書店